



連載

常陸時代の佐竹氏
— 500年の軌跡を追う —「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋

【第5回】

初期佐竹氏と藤原氏の平泉文化

平泉・中尊寺で「薬師如来坐像」を展示

平成20年（2008）10月から平成21年（2009）4月まで岩手県磐井郡平泉町、中尊寺で「讚衡蔵テーマ展『平泉』伝承の諸仏」が開かれた。展示物は15体。岩手県から13体、宮城・茨城県から各1体が並んだ。国宝1体（岩手県）に次いで国指定重要文化財が続く。その最初に茨城県からの仏像が登場した。

同展について中尊寺の寺報『関山』第15号（平成21年発行）は、「各地に長く伝えられ、信仰されてきた藤原氏ゆかりの諸仏をお招きし」と経緯を説明。次いで展示諸仏を紹介している。ここでも茨城の仏像が最初。仏像名は「薬師如来坐像」。同坐像は寄木造りで、像の高さは144.5㍎。制作年は12世紀とみられている。

『関山』にはこうある。「なかでも、茨城県常陸太田市西光寺の木像薬師如来坐像は藤原清衡公の娘が嫁した佐竹氏建立といわれる西光寺の本尊で、その穏やかな作風は平安時代後期、関東における定朝様式の一典型を示している」と指摘。そのうえで火災などの災難を蒙りながらも本尊を守ってきた地元を称えている。

その地元とは常陸太田市下利員町のこと。久慈川の支流、浅川の右岸台地上に西光寺はある。寺といっても今日あるのは山門と中に収納されている2体の木像仁王像、それと寺跡に建つ収蔵庫に安置された木造薬師如来坐像だけ。しかし、堂宇はないが、西光寺本尊は初期佐竹氏の姿を雄弁に物語っているかのようにみえる。

『薬師如来略縁起』と佐竹隆義

下利員町には、薬師如来坐像に関する伝承が残っている。今に伝わる『薬師如来略縁起』（以下、略縁起）によると、奈良時代の僧「行基」が造ったとされる薬師像がこの地にあつて、「利員城主源朝臣隆義公ノ息女眼病ニ苦シミ」、薬師様の「靈験新タナルコトヲ聞キ」、願掛け祈願を行った、という。

「期限満ツル仁安元年（1166）六月七日」、夢まくらに薬師如来が現れ、見えなかった息女の目が「鏡ノ如ク晴、（隆義公は）金ノ鷹羽三枚ヲ潰シ、尾崎氏良義ヲ以テ筑波山ヨリ徳一大師を招サレ御堂ヲ建立シ給ウ」とある。現薬師如来坐像はこの時、新たに造られ、本尊として御堂に安置された、と考えられている。

寛文3年（1663）、水戸藩が領内の寺社整理のために作成した寺社台帳『開基帳』に「下利数（員）村の西光院（寺）」について「行基菩薩之開基」で「徳一大師之為建立、仁安元年御堂建立」の記述がある。『略縁起』と内容が似ていることから寛文3年時点で既に地元にこの伝承が残っていたとみることができる。

注目される点は「源朝臣隆義」の存在である。隆義は佐竹氏初代昌義の子で、佐竹氏の『御當家系図』（「群書類従」収録）に「母奥州藤（原）清衡女也」とある。その隆義が『略縁起』に「利員城城主」とある。下利員は利員城の領内。薬師如来坐像をめぐる伝承は、佐竹隆義の時代に起きたことを今に伝えているのではないだろうか。

佐竹氏二代は忠義か、隆義か。

佐竹氏初代・昌義の子は、日本の初期系図集『尊卑分脈』に7人の名前が載っている。順にみると忠義、義弘、隆義、義宗、親義、義季、昌成である。うち佐竹当主を指す印は隆義に付いている。『御當家系図』や江戸幕府編さんの『寛政重修諸家譜』も初代昌義、二代隆義と記載している。

となると、長男の忠義はどうみればいいのか。忠義について『寛政重修諸家譜』は「太郎、常陸大掾、母は快幹が女。常陸国佐都西郡太田に住し、のち外戚の吉田某大掾が家断絶せるにより、同国府中に移り、その家名を継、常陸大掾となる」と述べている。

「外戚」とあるので「吉田某」は、忠義の母方の親類を指すとみられる。しかし、その具体的氏名は不明。むしろ注目される点は忠義が外戚の家名

を継ぐ前、「佐都西郡太田（以下太田）」に居たことである。「太田」とは、太田の城（館）に住んでいたということ。ということはこの時点で既に「太田」は佐竹氏の支配下にあった、と考えられる。

兄忠義が「太田」の城にいた当時、隆義はどこにいたのか。それを示す史料はないが、薬師如来坐像の由来を伝える『略縁起』に「利員城主」として「源朝臣隆義」がいたとある。忠義は太田の城、隆義は利員の城にいたとなると、忠義は一時的であれ、佐竹氏当主の座にあった、とみることができる。

隆義、昌義の「嗣」となる。

「太田」に居た忠義がなぜ「外戚」の「吉田某」の家を継ぐことになったのか。言葉を変えれば、なぜ隆義は「太田」を離れなければならなかったのか、ということである。吉田姓を名乗った家祖・吉田清幹の娘は、佐竹昌義の母。忠義の母は平快幹の娘。昌義、忠義とも外戚は平氏である。佐竹氏は源氏の名族であるが、常陸国においては初代昌義はいわば新興勢力である。

吉田氏は、常陸平氏の一門で、跡継ぎを選ぶなら数多くいる親類・縁者の中から選ぶこともできたはずである。にもかかわらず、なぜ新興勢力の佐竹氏から選んだのか。それとも昌義が外戚のお家断絶に乗る形で忠義を強引に送り込んだのか。その背景に吉田氏の中で勢力の弱体化が起きていたのか、どうか。解せない点が多い出来事である。

いずれにせよ、忠義は「太田」を離れた。『寛政重修諸家譜』は隆義について「兄忠義外戚の家を相続せるにより、父の嗣となり、太田に住す」と記している。「嗣」はあとつぎの意味。この段階で隆義は太田の城へ移った、と考えられる。隆義がどこから移ったのか。それを示す史料はないが、薬師如来坐像の『略縁起』を踏まえると、「利員城」からとみるのが自然な流れであろう。

秀郷流在地勢力に対する懐柔策

隆義を後釜に据えた背景に何があったのか。当時の常陸国北部は、坂東に戦乱を起こした平将門を倒した藤原秀郷の子孫が土着していた。昌義が常陸北部を掌握していくうえで、この秀郷系一族の扱いは気が抜けない問題だった、と考えられる。父義業、祖父義光は常陸平家の力を借りて「常陸国合戦」を戦った。その敵側この秀郷系一族もいた、と筆者はみている。

『尊卑分脈』によると、奥州藤原氏は秀郷の子孫「千晴」の子孫である。隆義の母、つまり昌義の妻は藤原清衡の娘である。常陸北部に土着していた既存勢力も秀郷系の子孫である。清衡の血を引く隆義が太田の城主になることは隆義と奥州藤原氏だけでなく、これら秀郷系既存勢力に対してもその距離感を縮めることに繋がったのではないかと。

昌義は隆義を佐竹氏当主に据えることで、同じ秀郷系の血をひく血縁関係を背景に秀郷系在地勢力の懐柔を図っていたのではないかと。もちろん、そうした策の背後に奥州藤原氏の存在があったことは無視できないだろう。昌義は父や祖父がとった秀郷系在地勢力との武力衝突を避け、無言の圧力をかけつつ支配地を広げていったのではないかと。下利員の薬師如来坐像の伝承は、そうした初期佐竹氏の姿を象徴する歴史的遺産とみることができる。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
富山 章一



西光寺の木像薬師如来坐像。
＝常陸太田市下利員町。（2014年
10月19日の「集中曝涼」時に筆者
撮影）